

【原 著】

自立活動の個別の指導計画作成に関わる
チームによる検討の在り方

川上 佳奈 重永 多恵 角原 佳介 高下 心輔 仲矢 明孝

Toward Effective and Efficient Team Meetings in Designing Individualized
Instruction Plan in Activity to Promote Independence

KAWAKAMI Kana, SIGENAGA Tae, KAKUHARA Keisuke,
KOUGE Sinsuke, NAKAYA Akitaka

2023

岡山大学教師教育開発センター紀要 第13号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.13, March 2023

自立活動の個別の指導計画作成に関わる

チームによる検討の在り方

川上佳奈※1 重永多恵※1 角原佳介※1 高下心輔※1 仲矢明孝※2

A 知的障害特別支援学校では、各学部教師全員で検討する「自立活動検討会」において全児童生徒の自立活動の個別の指導計画の作成と評価を行っている。本研究では、実施された検討会の経過を整理、分析することにより、チームによる効率的・効果的な検討会の在り方について検討した。従来の検討会の課題の改善を意図して実施された前期設計及び後期設計の検討会に参加した教師の意識や話し合いの内容等の変容を確かめるため、参加した教師全員に、2回のアンケート調査等を実施した。その結果、児童生徒全員に一律ではなく、ケースに応じた検討時間と検討内容の設定、検討会における適切な「問い」の提示、ホワイトボードの有効活用等により、検討時間の短縮と効率化が図られたこと、及び検討会に対する教師の満足感等が確かめられた。一方で、検討会の課題は、日頃の自立活動の指導の充実との関連が深く、指導の充実に向けた取組の必要性が示唆された。

キーワード：自立活動，個別の指導計画，検討会，効率性，質の向上

※1 岡山大学教育学部附属特別支援学校

※2 岡山大学学術研究院教育学域

I はじめに

自立活動は特別支援学校の教育課程に特別に設けられた指導領域であり、特別支援学校のみならず、小学校等の特別支援学級や通級による指導等、特別支援教育において重要な位置を占めている。特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領（文部科学省(2017)、以下、学習指導要領）の中で、「自立活動の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の障害の状態や特性および心身の発達の段階等の的確な把握に基づき、指導すべき課題を明確にすることによって、指導目標及び指導内容を設定し、個別の指導計画を作成するものとする。」とされ、個別の指導計画作成の義務化と指導上の留意点が示されている。さらに、学習指導要領の中では、自立活動の個別の指導計画の作成に当たり「実態把握に基づいて得られた指導すべき課題相互の関連を検討すること」の重要性が示されている。一方、文部科学省中央教育審議会（2016）は、自立活動における実態把握、指導目標及び具体的な指導内容の設定までのプロセスを教師が十分理解しないまま指導が行われているという課題を指摘している。教育現場においても、従来から自立活動の個別の指導計画作成に関わる困難さを指摘する声が多く、岡山県総合教育センターが2015年に作成し、2019年に改訂した「自

立活動ハンドブック「知的障害のある児童生徒の指導のために―Ver.2」では、個別の指導計画の作成手順等を具体的に分かりやすく示しており、地域の学校等において今なお多く活用されている。個別の指導計画の作成に関わる課題を踏まえ、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）（文部科学省（2018）、以下、解説自立活動編）において「実態把握から具体的指導内容を設定するまでの流れの例（流れ図）」が示され、流れに沿って具体的に詳しく解説されるとともに、11の事例が掲載された。しかし、教育現場において、多様な実態の子どもたち一人一人について、実際に個々の子どもの中心的課題を導き出し、指導目標や具体的指導内容を設定するには高い専門性が求められ、個別の指導計画の作成は困難な作業と言える。この課題に対応すべく、各地の教育センターや学校等の研修では、今なお自立活動における個別の指導計画作成に関わる内容が多く取り上げられている。指導する内容が決まっている教科の指導と異なり、指導の道筋そのものを組み立てていく指導とも言われる自立活動の指導は、その重要性和共に、設計・指導・評価を行う際の困難さを多く抱えている。なお、本研究においては、これ以降、「自立活動の指導における個別の指導計画」を「個別の指導計画」と略記する。

自立活動の指導について、学習指導要領（2017）の中で、「専門的な知識や技能を有する教師を中心として、全教師の協力の下に効果的に行われるようにするものとする」、さらに、「各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動の指導と密接な関連を持つようにし、計画的、組織的に指導が行われるようにするものとする」と示されており、自立活動の指導は、自立活動の時間における指導だけでなく、学校の教育活動全体を通して、全教師が協働で取り組むべきものである。直接、間接を問わず、子どもたちと関わりのある全ての教師の連携が不可欠であり、設計過程は勿論、指導過程、評価の過程を含め、全て過程においても、チームによる効果的な取り組みが求められる。

また、解説自立活動編（2018）の中で、「個別の指導計画の作成には、校内で専門的な知識や技能のある教師が関与することが求められ、各学校に専門的な知識や技能のある教師が適切に配置されていることや、各学校においてこうした教師を計画的に養成していくことが必要である。」とされており、教育現場における協働での取り組みは、指導上の効果のみならず、自立活動に関わる教師の専門性を高めるとい教員研修の観点からも重要と言える。内海・安藤（2021）は、自立活動に関わる教師の専門性の育成について、①個別の指導計画作成の各段階に応じた複数回の実施、②学級担任中心の教師集団の協働、③実習形式の3点の重要性を指摘し、教育現場におけるチームによる実践的・組織的な取り組みによる研修の重要性を示唆している。植田・安藤（2021）は、自立活動に関する教師の力量形成には教師たちの共働化を促進する学校組織の形成や実践経験に応じた研修内容を見直すことが必要であること、学校組織における同僚教師と課題を共有し解決する共働化の確保が教師の抱える指導の困難さの低減に寄与することを示している。宮野（2021）は、対話型事例検討プログラムである5分間ミーティングに取り組んだ結果、実際に取り組んだ教師が、支援

目標と支援方法を複数担任チームで共有できる点を高く評価していたと報告している。真金・千川（2016）は、ショートケース会議を定期的実施することが、教師の意識や行動を変容させ、校内支援体制にも良い効果を与えたことを報告している。さらに、大西・有井（2019）は、自立活動に関する教師の専門性向上を目指した「事例検討会」を実施した結果、教師の多様なニーズに対応する研修の難しさとともに、教師の内発的な動機付けに基づく研修の重要性を示している。このように、高い専門性が求められる自立活動の指導の困難さと教師の研修としての意義を踏まえ、教育現場でのチームによる実践的・組織的な取り組みが重要であると言える。

A 知的障害特別支援学校（以下、A 校）では、在籍する小学部 18 名、中学部 18 名、高等部 24 名、合計 60 名の全児童生徒の個別の指導計画の作成にあたり、各学部の教師全員（各 8～9 名）が集まり、チームで話し合う自立活動検討会を実施している。その中で、設計過程の検討事項である児童生徒一人一人の中心的課題、指導目標、具体的指導内容等について、全員で検討している。なお、自立活動の指導の評価については、各学級担任 2 名、各学部の特別支援教育コーディネーター、各学部教頭の 4 名の小グループで行っている。A 校には、小学部、中学部、高等部とは別に、自立活動の時間における指導（抽出による個別指導）を担当する発達支援室が設けられ、4 名の教師が配置されている。そのうちの 3 名が各学部の特別支援教育コーディネーターの役割を担っており、自立活動検討会も、この 3 名が中心となって推進している。A 校において、前年度末に実施された教育課程の反省の中で、自立活動活検討会に関わる課題がいくつか挙げられていた。学部による違いはあるが、それらは次の 2 点にまとめられる。1 点は、検討に長時間を要することや話し合いによる充実感の少ないケースがあるため、教師が負担感を感じていること、2 点目は、対象児童生徒と直接関わりのある教師だけで話し合う方が効率的であり、学部教師全員で話し合うことに疑問を感じていることである。これらの課題を踏まえ、自立活動検討会を推進している発達支援室では、持続的、組織的な自立活動検討会とするための改善案を作成し、それに基づいて 4(5) 月に自立活動検討会（前期設計）を実施した。この実施結果を踏まえて改善案を作成し、8 月の自立活動検討会（後期設計）を行っている。

本研究では、A 校において、全児童生徒の自立活動の個別の指導計画を作成するために、各学部教師全員で話し合われる自立活動検討会の実施経過を整理、分析することにより、チームによる効率的・効果的な検討会の在り方について検討する。

Ⅱ 方法

A 校の自立活動検討会は表 1 のように実施されている。年度初めの自立活動検討会（前期設計）は、4 月に在校生、5 月に新入生を対象としている。在校生の場合、前年度末（3 月）の自立活動検討会において、既に、児童生徒個々の中心的課題を導き出しており、4 月の自立活動活検討会では、その中心的課題に

表 1 自立活動検討会に関わる年間計画

参加教師	実施月・対象	検討内容
全員	3月:在校生 4月:新入生	中心的課題に基づき、長期目標、前期目標、具体的指導内容、指導場面について確認、検討する。 *自立活動検討会A（前期設計）
小グループ	4・5月:全員	様々な情報に基づき、中心的課題の特定を中心に検討し、長期目標、前期目標、具体的指導内容、指導場면을決定する。
（指導）	5～7月:全員	指導の記録の回覧、必要に応じた指導の見直し
小グループ	7月末:全員	前期評価
全員	8月・9月:全員	中心的課題の見直し・後期目標・具体的指導内容・指導場面 *自立活動検討会B（後期設計）
（指導）	9～2月:全員	指導の記録の回覧、必要に応じた指導の見直し
小グループ	2月:全員	後期評価

に基づき、新担任等が考えた指導目標や具体的指導内容（案）について、全員で検討し、設定している。新入生が対象となる5月の場合、様々な視点からの情報収集に基づき、「気になる姿」（課題）の抽出、及び中心的課題の特定を主な検討事項としている。

自立活動検討会の実施状況を踏まえ、本研究では、以下の手順により、自立活動検討会の在り方について検討する。

- ① 前年度の自立活動検討会に関わる課題及び課題の解決を目指した改善方法等の整理。
- ② 改善案に基づいて実施された自立活動検討会A（前期設計）の評価（全教師を対象としたアンケート調査）結果及び課題の改善方法等の整理。
- ③ 改善案に基づいて実施された自立活動検討会B（後期設計）の評価（全教師を対象としたアンケート調査）結果の整理及び検討。
- ④ 評価結果を踏まえた自立活動検討会の在り方に関する検討。

なお、A校の全教師に本研究の目的や方法等について説明し、研究参加への同意を得た。

Ⅲ 結果

1 前年度実施された自立活動検討会の課題とその改善案

前年度末に実施された教育課程の反省（アンケート及び各学部での話し合い）において、自立活動検討会に関わる課題がいくつか挙げられた。各学部の主な内容を以下に示す。

【小学部】学部の教師全員が集まるのではなく、小グループ（担任、コーディネーター、教頭の4名）による検討で良いとする意見が最も多かった。また、話し合いや自立活動シート（個別の指導計画）の作成に多くの時間を要するため、負担感を感じるという意見も見られた。小学部では、他の学部に比べてク

ラス別の授業が多く、他クラスの児童の指導に担任外の教師が関わることが少ないため、自立活動検討会で担任外の教師が指導方針について考え、発言することが難しく、全員で検討する意義を感じ難いと考えられる。

【中学部】縦割りの授業が多く、担任外の生徒の指導を行う場面が多いにもかかわらず、自立活動検討会で発言するのは担任が中心で、その他の教師の発言が少ないことが指摘されていた。また、時間が予定より延びること、「気になる姿」や「中心的課題」が特定されないまま、話し合いが漠然と進んでいくこと等も課題として挙げられていた。

【高等部】自立活動検討会に関する意見等は挙がっておらず、自立活動シートの文言についての指摘があった。

以上のように、A校の自立活動検討会では、各学部とも全児童生徒を対象として検討するため、長時間を要することや、ケースによっては話し合いによる充実感・満足感が少ない場合もあり、教師は少なからず負担感を感じていると言える。自立活動検討会の内容が「情報の共有」にとどまっているならば話し合いの深まりは少なく、全員で行う意味が希薄になり、やりがいも感じにくくなると考えられる。

これらの課題を踏まえ、自立活動検討会を企画・運営する発達支援室において、話し合いの「質の向上」と「効率化」を目指し、改善策が検討された。ここで言う「質の向上」とは、全員が同じテーマで思考し、互いに意見を出し合いながら、新たな方向性を導き出していくことであり、そのような話し合いの中で、自立活動検討会の意義や目標を実感として共有し、参加する教師はやりがいを感じることができると考えられた。同時に、話し合いの質の向上によって個別の指導計画の妥当性も高まると考えた。また、時間設定や検討内容を精選し、「効率化」を図ることも改善すべき重要な課題であった。これらの2点から自立活動検討会を改善することにより、学部教師が全員で検討することの意義を実感し、負担感を減少させ、充実感を味わうことができるようになると考えられた。

2 課題の改善を意図した自立活動検討会A（前期設計）の実施とその結果

前期設計の自立活動検討会Aでは、話し合いの「質の向上」と「効率化」を目指し、具体的に次の2点について、工夫しながら話し合いが進められた。

- ①個々の参加者が考えやすく、全員で共有できるようにするために、適切な「問い」を設定して提示し、それに沿って話し合う。
- ②話し合いの質の向上と効率化を意図し、ホワイトボードを効果的に活用するように工夫する。

なお、時間配分については、一人平均10分程度、1回の検討会に要する時間を1時間程度として設定された。

（1）「問い」の設定

- ・在籍児童生徒の場合（4月）

どのように指導し、どのような具体的な姿を目指すのかをについて共有し、

具体的な指導内容や指導場面を設定しやすくするために、「どんな姿?」「どんな場面?」等の問いを提示し、児童生徒個々の短期目標をより具体化しようと試みた。その結果、各学部とも、短期目標が具体化され、どのように指導をしていくのかを全教師が概ね共有し、具体的指導内容を整理することができた。一方で、子どもが「何を学ぶのか」の問いに対する発言が少なかったため、「何のために(指導するのか)」の問いが示されたが、ケースによって捉え方にズレが生じた。その場合には、「どういうやり方で(教師が指導していくか)」「(子どもに)どんな力を身に付けさせたいか」のように、問いをいくつかに分けて提示することで発言を促すことができた。

・新入児童生徒の場合(5月)

事前に収集した「気になる姿」のエピソードから、中心的課題を特定することが話し合いの主なテーマとなった。課題を抽出する際、「本人の課題は何か?」という問いの場合、「課題」という言葉のもつ意味が多様であったため、「課題」を「困難さ」や「難しさ」に置き換えて、「本人の難しさ(困難さ)は何か?」「どういうことが難しいか(に困っているか)?」等の問いが提示された。また、中心的課題の検討に関わる視点の「必要性」については、「今何が必要か?」「それは本人にとって切実か?」、適時性については、「今指導することが適切な時期か?」、「実現性」については、「12年間で達成可能か?」、「ニーズの反映」では、「子どもや保護者の願いに沿うものか?」等の問いが提示された。しかし、新入生の場合、入学前の情報が限定的であり、4月から1カ月間で気になる姿の情報を収集し、課題を抽出するのは容易なことではなく、検討会の時間内には中心的課題を特定できなかったケースもあった。このような場合には、その時点で考えられた中心的課題、指導目標を設定し、それに沿った指導を進めながら、実態、課題がより明確になった時点で、必要に応じて目標を修正するなど、柔軟に対応されることとなった。

(2) ホワイトボードの活用

前述した「何のために指導するのか?」という問いの場合、出される意見について、「教師が指導すること」と「子どもが学ぶこと」を色分けして記入するなど、記入する際の色分けの工夫が行われた。また、ホワイトボードに発言内容を記入する際、参加者が思考しやすいように、意見と意見の関連性を線で結んだり(囲んだり)、上下左右のスペースを開けて記入したりする等の工夫が行われた。これらの工夫により、全体の意見を整理して示すことができ、指導の方向性を把握し、共有しやすくなったという参加者の声も聞かれた。さらに、限られた時間の中で、短期目標の具体化を図りながら、「教師の指導すること」と「子どもが学ぶこと」を意識した発言も増えていった。

3 自立活動検討会A(前期設計)に関するアンケート調査の結果

A校全教師を対象とし、4,5月に実施した自立活動検討会A(前期設計)に関わるアンケート調査(表2)を実施した。対象者22名、回答者21名、回答率95%であった。

表 2 自立活動検討会 A（前期設計）実施後のアンケート調査

【全体に関わる質問】＊４件法（そう思う・ややそう思う・あまり思わない・そう思わない） ① 今回行った自立活動検討会によって、個別の指導計画（自活シート）の内容の妥当性（適切さ）が高まったと思いますか。 ② 今回行った自立活動検討会に参加することで、気づきや学びがあがったと思いますか。 ③ 従来の自立活動検討会に比べ、改善されたと思いますか。また、そのように回答した理由を簡単に書いて下さい。（自由記述）	
【具体的事項に関わる質問】 ④ 時間設定は適切でしたか。＊３件法（適切だった・短かった・長かった） また、そのように回答した理由や改善点を書いて下さい。（自由記述） ⑤ 「問い」の内容について考えやすかったですか。＊２件法（そう思う・そう思わない） また、その改善点を書いてください。（自由記述） ⑥ 「問い」に対して意見を言いやすかったですか。＊２件法（そう思う・そう思わない） ⑦ ホワイトボードの記録（表記の仕方）は分かりやすかったですか。 ＊２件法（そう思う・そう思わない） また、その改善点を書いてください。（自由記述） ⑧ ホワイトボードを見ながら考えやすかったですか。＊２件法（そう思う・そう思わない） また、その改善点を書いてください。（自由記述）	

学部別の結果（人数）を図 1 に示す。質問項目によって、回答の選択数は異なるが、全体として、質問⑥以外の質問項目において、8 割以上が肯定的な評価であった。特に質問②「気づきや学びがあがったか」については、全員が肯定的評価であり、研修としての意義が認められる。次いで、ホワイトボードの活用に関する質問⑧と質問⑦、自立活動検討会が改善されたかどうかを尋ねている質問③が高い評価結果となっていた。今回、改善のポイントとしていた「問い」については、問いがあることによって、必ずしも発言のしやすさに直接結びついたとは言えないが（質問⑥）、ほとんどの教師が考えやすくなったと回答している（質問⑤）。また、小学部と中学部では 8 つの質問項目の殆どが肯定的な評価であったのに対し、高等部では、肯定的評価が少なく、学部による違いも見られた。次に、自由記述の主な内容を以下に示す。

・質問③「従来の自立活動検討会に比べて改善されたと思うか。」

【小学部】効率性の向上（時間設定＝タイムマネジメント、検討内容の焦点化、問いの設定）、活発な意見交換、前回の課題の修正・改善がなされたこと等の肯定的意見。全体ではなくクラス別の検討会を希望する意見。

【中学部】会の進行役が、検討内容を焦点化して示し、適切に会をコントロールし、改善されたとする意見。

【高等部】効率性（時間設定、検討内容の焦点化）と共に、課題に沿った柔軟な運営ができたとする意見、内容の深まり（質）に課題があるとする意見、会の運営の修正の必要性（担任説明の省略等）を指摘した意見。

・質問④「時間設定は適切であったか」

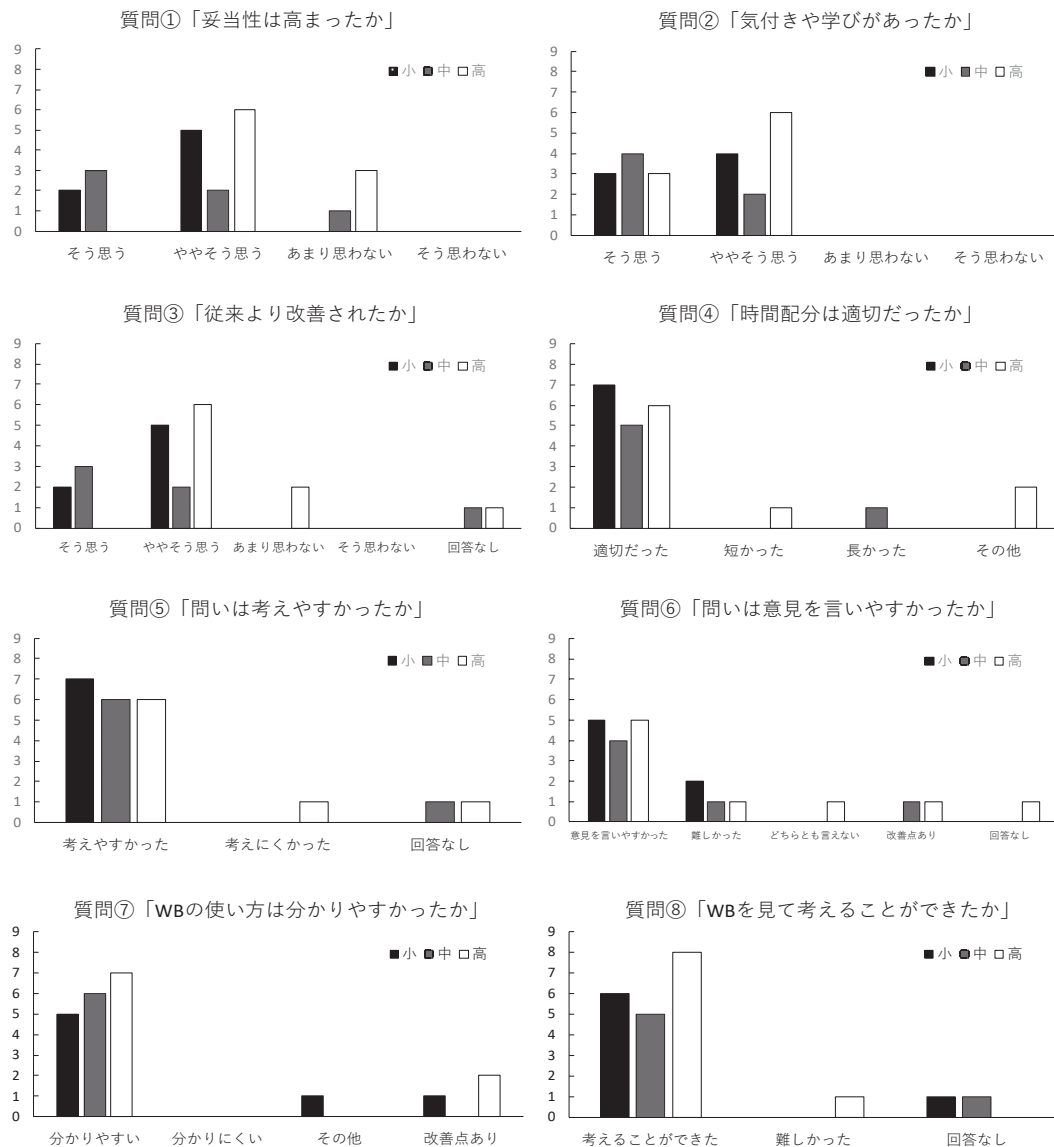


図1 自立活動検討会（前期設計）に関するアンケート調査結果（人数）

【小学部】効率的でよい、自分のクラスの子どもだけの検討にすべき、対象によって検討時間を変えるべきとする意見。

【中学部】効率性（時間短縮）を評価する意見、生徒によって（新入生と在校生等）時間を変えることの必要性を指摘する意見。

【高等部】検討会の意義や趣旨を踏まえた肯定的評価、生徒によって時間を変えることの必要性、学級の生徒によって検討を省略することの必要性を指摘する意見。

・質問⑤「『問い』の内容について考えやすかったか」、⑥「『問い』に対して意見を言いやすかったか」

（小学部）自立活動の捉え方や発言の仕方、受け止め方に関する課題の指摘。

（中学部）同時に複数の問いがあることの問題点の指摘。

（高等部）実態把握に関する課題の指摘。

・質問⑦「ホワイトボードの記録は分かりやすかったか」、⑧「ホワイトボードを見ながら考えやすかったか」

（各学部）枠や矢印の効果的な使い方に関する具体的で新たな提案。

4 アンケート調査結果を踏まえた自立活動検討会B（後期設計）の改善案と検討会実施の結果

（1）改善案 ケースに合わせた時間配分と検討内容の焦点化

前回実施した自立活動検討会Aに関して、効率化については、時間配分や検討内容の焦点化など、肯定的評価が多かったが、ケースによっては、話し合いの内容の深まりが不十分だとする意見が複数見られた。そこで、後期の自立活動検討会B（後期設計）では、まず、全てのケースを次の④⑤の2つに分類し、検討内容や検討時間等の話し合いの進め方を変えて実施されることとなった。④検討の困難性が低いケース（指導に関わる課題が少なく、指導の効果が見られている）→ 指導については、前期の継続または発展となり、大幅な見直しはなく、検討の困難性が低いため、検討会では検討内容を絞って短時間で行う。⑤検討の困難性が高いケース（指導方針が曖昧で指導に関わる課題が多く、指導の効果が見られない場合、または、新たな目標設定が必要となる場合）→ 前期の計画を見直す必要があるため、検討会では、中心的課題や目標等について一定の時間を割いて検討する。

各学部において、前期の評価を踏まえ、全児童生徒を④または⑤に分類することを試みた。その結果、2分類は難しく、④⑤の中間段階が必要となり、結果として、以下の④⑤⑥の3分類にして検討会が進められた。

④検討の困難性（低）検討時間約5分、検討内容は指導方針等の確認。

⑤検討の困難性（中）検討時間10～15分、検討内容を焦点化して実施。

⑥検討の困難性（高）検討時間約20分、検討内容は中心的課題及び目標の見直し等。

各学部で3分類した結果、多くの検討を要する⑥に該当するのは合計12のケースであり、その主な判断理由と検討すべき内容は以下の通りである。

- ・従来とは別の「気になる姿」が現れてきたケースで、検討内容は中心的課題、及び目標の見直し。
- ・「気になる姿」の変容が見られないケースで、検討内容は中心的課題、及び目標の見直し。
- ・教師間で「気になる姿」、中心的課題、評価規準等の捉え方にズレがあるケースで、検討内容は中心的課題等の再検討。
- ・指導機会が不十分（登校できていない）なケースで、限定された指導場面で何をどのように指導していくのかについての検討。

（2）改善案に基づく各学部の実施結果

改善案に基づいて実施した結果を各部ごとにまとめ、以下に示す。

【小学部】

・3つに分けて実施した結果、 **表3 自立活動検討会（後期設計）の時間**

◎であった10ケース中、9ケースで十分な検討が行われるなど、検討内容について、効率的、効果的な話し合いが行われた。

前年度の計画	本年度の実績
一人平均 16 分 (小学部 15 分、中学部 18 分、高等部 15 分)	一人平均約 8 分 (小学部 11 分、中学部 8 分、高等部 6 分)

- ・ケースによって時間配分を柔軟に変更することで、話し合いに要した時間は、一人平均約 11 分であった。短時間でも話題が共有できている場合、話し合いが深まるケースが多かった。実際に、負担感が減ったという声も聞かれた。
- ・具体的指導内容について「実際にどう指導したらよいか」という問いを示すことで、指導の意図、指導内容が明確になったケースがあった。
- ・内容を焦点化することで、話題を共有して話し合うことができた。
- ・指導の方針が不確かなケースについては、話し合いでも意見が出にくく、まとまり難い傾向にあり、④のケースでも多くの時間を要することもあった。

【中学部】

- ・実際に要した時間は、一人平均約 8 分であり、やや時間に追われる感じはあったが、検討会に要した時間は短縮されていた。
- ・全体として「問い」に沿って意見がよく出ていたが、最初の担任の説明が長くなっていた。
- ・④のケースのうち、2 ケースについては検討できなかった。また、問いを示さなかった場合、原案を肯定するだけで殆ど意見交換が行われなかったケースもあった。一方で、「みんなで指導できるか」という問いを立てると意見が多く出され、具体的な指導のイメージを共有することができた。
- ・◎のケースは、事前に小グループで検討しておくことにより、時間短縮が図られた。また、中心的課題の見直しのケースは、「気になる姿」（課題）が多いケースであり、意見が多く出された。
- ・時間が短い分、ホワイトボードへの記入はコンパクトになったが、◎のケースではスペースを十分使って書き込まれていた。

【高等部】

- ・検討会に要した時間は、一人平均約 6 分であった。時間は短縮されたが、時間にしばられるのではなく、目安と考えるべきだとする意見もあった。
- ・④のケースの場合、意見交換しなかったケースもあったが、その場合、ホワイトボードを使わず、口頭でのやりとりのみとなり、話題がズレる傾向にあった。
- ・教師間での共通理解に話し合いの重点を置いたが、話題がズレるケースもあった。話し合いを進める際、参加者が問いの内容を共有しておくとともに、進行役は事前のシートの読み込み、分析をしておくことで、話し合いの質をより深めることにつながると考えられた。
- ・◎のケースでは「しっかり話せてよかった」という担任の意見があった。一

方で、「気になる姿」のエピソードが少ないため、全員で考えることが難しいケースもあった。また、発言の関連性がわかるようなホワイトボードの記録の仕方の工夫が必要であるとする意見もあった。

・生徒の具体的な姿についての意見が多く出され、参加者の満足度は高かった。

5 自立検討会B（後期設計）に関わるアンケート調査の結果

自立活動検討会の効率化と質の向上を目指し、いくつかの改善策を講じながら自立活動検討会B（後期設計）が実施された。その結果、教師の意識がどのように変化したか等を確認するため、自立活動検討会A（前期設計）の場合と同様のアンケート調査を実施した。その結果を図2に示す。対象者22名、回答者18名、回答率82%であった。全体として、肯定的評価が多く、前回と同様の傾向がみられた。質問①「妥当性は高まったか」③「従来より改善されたか」については、「ややそう思う」が減少し、「そう思う」が増加している。③の自由記述の内容を見ると、検討時間の短縮、焦点化した効率的な話し合い、他学年の児童生徒や教員の考え方が分かったことによる本検討会の意義の実感等、肯定的な意見が多かった。⑥の問いに関する質問や⑦⑧のホワイトボードの活用に関する質問については肯定的評価がやや増えており、④「時間配分は適切であったか」、⑤「問いは考えやすかったか」の質問については、前回と同様、約9割の教員が「適切であった」と評価している。④の自由記述を見ると、ケースによって軽重がつけられていたこと、必要なケースに時間を費やすことができたこと、働き方改革等の点から、肯定的に評価している意見が多かった。

IV 考察

1 ケースに合わせた時間配分と検討内容

全体として、中心的課題の修正がなく、継続・発展という視点で指導内容の確認を行う「④（短時間による検討）」のケースが最も多かった。一方で、中心的課題や目標設定の見直しを行う「③（一定の時間による検討）」も各部4ケース、合計12ケース存在していた。

前述したように、自立活動検討会B（後期設計）を実施した結果、各学部とも③のケースについては、検討が十分できたとする意見が多かった。一方で、④のケースについては、小学部に比べ、中学部、高等部では、必ずしも話し合いが十分ではなかったとする感想が見られた。小学部では、事前に、ケースごとに、検討会で何について話し合うのかについて、細かく、個別化・焦点化し、それを部内で共有していたことが、話し合いの深まりに影響を及ぼしたと考えられる。また、各学部とも、ファシリテーターの役割を担う特別支援教育コーディネーターが検討の進め方について、事前にいくつかのパターンを想定して検討会に臨んでいた。できるだけ多くのパターンを想定するには、事前にシートを詳細に読み込み、個々の子どもの指導場面や評価規準を具体的に把握して検討内容を焦点化し、話し合いで明らかにすることを明示しておくことが必要となる。しかし、特別支援教育コーディネーターが、毎回、この作業をするの

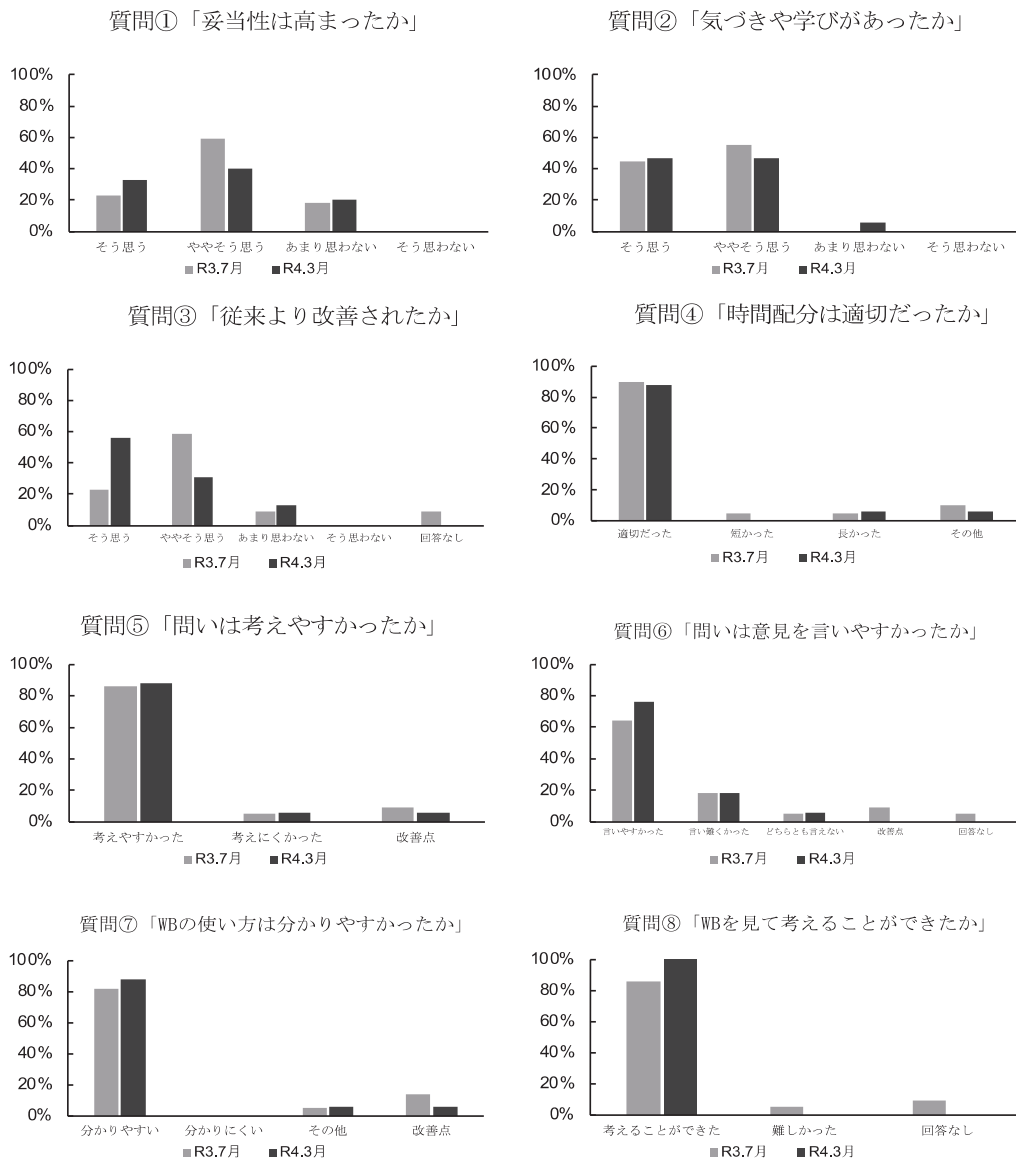


図2 前・後期の自立活動検討会に関するアンケート調査結果の比較（割合）

は困難と言える。話し合いの内容を深めるには、参加する教師全員がクラスを超え、日々の指導の中で、より多くの子どもの実際の姿を把握し、課題を捉えておくことが必要である。それには、以下のような取り組みが重要と考える。

- ・ 個々の自立活動の指導の様子を記録する「記録シート」等を活用しながら、学級等の学習の中での子どもの姿をより多くの教師が捉えておく。
- ・ 特別支援教育コーディネーターは、子どもの課題や指導上の課題について、担任等と話し合い、明確にしておく。
- ・ 特別支援教育コーディネーターは、検討内容を焦点化し、検討する目的をより明確にしておく。

今回、個々のケースによって検討の時間や内容を変えて検討した結果、検討の内容が深まり、効率的に実施できたことは成果として挙げられる。検討時間

が短縮され、負担感が減ったという教師の意見も多かった。一方で、限られた時間の中で内容を深めるにはある程度の限界があること、時間とは関わりのない課題（事前の確認、ホワイトボードの活用等）の存在も確かめられた。これらの点も踏まえながら、前述した3点に取り組むことで、チームで話し合っ計画し、指導し、改善するという自立活動のサイクルを回しながら、自立活動検討会の課題を焦点化し、その改善を図っていくことが必要である。

2 適切な「問い」の設定と提示

今回、問いを設定して検討会が進められたことにより、アンケート調査結果にもあったように、ほとんどの教師が考えやすくなったと回答している。実際の検討会でも、指導目標や指導方針が具体化され、それに基づいて具体的指導内容を導き出すことができるようになるなど、問いの設定が話し合いの質の向上に寄与したと考えられる。一方で、「本人の課題は何か？」などの抽象度の高い問いを設定した場合や、同時に複数の問いを提示した場合等には、参加者の捉え方にズレが生じ、戸惑いも見られている。今回、問いを設定して検討会を進めたことにより、問いを設定することの意義や必要性和ともに、より適切な問いの選択と提示の仕方に関するさらなる検討の必要性が示唆された。さらに、問いの設定により、検討会の時間の長短に関わらず、問いに沿った意見交換ができ、充実した話し合いとなったケースが数多く見られており、検討会の質の向上とともに、教員の研修としての意義も示唆される。

3 ホワイトボードの活用

高等部では、④のケースの場合にホワイトボードを活用することなく検討した結果、話し合いのポイントや問いの共有ができず、意見がばらつき、まとめることが難しかった。一方で、各学部でも⑤のケースにおいて、各教師の発言内容の関連性が分かるようにホワイトボードに記入していくことで、話し合いを深めていくことにつながっていた。今回の取り組みの結果、ホワイトボード活用の意義は以下の3点にまとめることができる。

- ・問いや検討内容、目的をホワイトボードに示しておくことで、話し合っている内容や視点を参加者全員で共有できる。
- ・多様な意見が出た際、本来の話題とのズレを確認し、立ち返ることができる。
- ・意見相互の関連性を整理し、確認しやすく、全員で思考するツールとなる。

宮野（2021）がミーティングの際に視覚的なツールを使ったコミュニケーションが有効であるとしているように、本研究においても、共通の話題に沿って話し合い、内容を深めていくには、視覚的媒体であるホワイトボードの効果的な活用の重要性が示唆された。一方で、全員が思考し、より効率的な話し合いを行うには、検討する個々のケースに対応したホワイトボードの活用方法のさらなる検討、工夫の必要性も示唆される。

V おわりに

文部科学省中央教育審議会（2021）の答申「令和の日本型教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～」において、子供にとって個別最適な学び、教師にとっては、「指導の個別化と学習（課題）の個別化」が求められている。これは、特別支援教育において従来から目指されてきた「個に応じた指導」と重なる部分があり、個別最適な学びのために重要な役割を果たしているのが個別の指導計画と言える。本研究では、個別の指導計画の作成をチームで取り組んでいるA校の取り組みの経過に基づいて検討した。A校では、持続的、組織的な自立活動検討会となるよう、検討会の質の向上と効率化を目指し、課題の改善に向けた取り組みが行われた。実際には、対象となる子どものニーズに基いて検討に要する時間や検討内容等を設定すること、検討会を推進する特別支援教育コーディネーターが、事前に個々のケースについて検討会の流れを予測し、適切な問いを用意しておくこと、ホワイトボードを効果的に活用することであった。これらの取り組みにより、昨年度に比べ、検討に要する時間が短縮され、話し合いの質が高まり、より妥当性のある個別の指導計画の作成に影響を及ぼしたことが推測された。一方で、検討会の時間の長短とは関わりのない課題、即ち、学校の教育活動全体での取り組み方によって、検討会の内容の深まりも異なるという課題が存在していた。これは、自立活動検討会で個別の指導計画を作成する設計過程よりも、むしろ指導過程における課題と考えられるのであり、今後は、指導過程の課題についても検討し、改善していくことが必要となる。

また、自立活動検討会の話し合いが効率的に行われ、話し合いの質の向上が図られるに伴い、教師の満足度も増し、負担感も減少している。大西・有井(2019)は教員の研修ニーズが多様であることから教員自身の内発的な欲求に基づく自主的な研修の重要性を示唆し、内海・安藤(2021)は個別の指導計画作成に関わる教師の協働に基づく校内研修の有効性を示している。本研究においても、教師の負担感を減少させ満足感を増やした自立活動検討会の研修としての意義が示唆された。

参考・引用文献

- 古川勝也・一木薫（2016）自立活動の理念と実践－実態把握から指導目標・内容の設定に至るプロセス．ジアース教育新社．
- 北川貴章・安藤隆男（2019）「自立活動の指導」のデザインと展開．ジアース教育新社．
- 真金千草・千川隆（2016）特別な支援を必要とする児童と校内支援体制に及ぼす課題解決モデルに基づくショートケース会議の効果．LD 研究, 25, 489-502.
- 宮野雄太（2021）研究係の立場からの知的障害特別支援学校教員の協働場面に対する介入－事例継続検討プログラム「5 分間ミーティング」の導入を通して－．特殊教育学研究, 59(1), 37-46.
- 文部科学省（2016）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学

- 習指導要領の改善及び必要な方策等について(中央教育審議会答申).
- 文部科学省(2017) 特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領.
- 文部科学省(2018) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編(幼稚園・小学部・中学部).
- 文部科学省(2021) 令和の日本型教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～(中央教育審議会答申).
- 大西彩乃・有井香織(2019) 自立活動に関する現職教員研修の実践に関する研究－「自立活動研究会」の取り組みから－. 筑波大学附属桐ヶ丘特別支援学校研究紀要, 54 巻, 43-52.
- 岡山県総合教育センター(2019) 自立活動ハンドブックー知的障害のある児童生徒の指導のためにーVer. 2.
- 下山直人(2018) 知的障害特別支援学校の自立活動の指導. ジアース教育新社.
- 植田佐知子・安藤隆男(2021) 自立活動の授業過程における肢体不自由特別支援学校教師の困難さへの対処. 特殊教育学研究, 59(2), 73-82.
- 内海友加利・安藤隆男(2021) 肢体不自由特別支援学校における教師の協働に基づく校内研修プログラムの実施と有効性ー自立活動の指導における個別の指導計画作成に焦点を当ててー. 特殊教育学研究, 59(3), 179-190.
- 全国心身障害児福祉財団(2011) 新しい自立活動の実践ハンドブック. 全国心身障害児福祉財団.

Toward Effective and Efficient Team Meetings in Designing Individualized Instruction Plan in Activity to Promote Independence

KAWAKAMI Kana*1, SIGENAGA Tae*1, KAKUHARA Keisuke*1, KOUGE Sinsuke*1,
NAKAYA Akitaka*2

Keywords: Activity to Promote Independence, individualized instruction plan, team meeting, efficiency, quality development

※1 Special School Affiliated with the Faculty of Education at Okayama University

※2 Faculty of Education, Okayama University
